

# 大浦写真風土記

---

文／大西光衛・小川祥夫・西道了昌・前川 雅

撮影／大西光衛・小川祥夫・西道了昌・平井長栄

# クリーク

大浦・東蚊爪・木越は県下でも代表的な水郷地帯であった。

その昔木越町が加賀一向宗のかなり重要な砦であり、縦横に走るクリークが城壁の役割を成していたのだという。

それはともかく我々の幼い頃は満々と水をたたえ、色々の川藻が彩をなす数多くの川が健在であり、今日の姿をながめたとき、今昔の感にたえない。

主なる基線は川巾およそ、八メートルもある川であり、その内の何本かは今でも昔の面影をかすかに残している。その用途は田の落し水の排水路と、稲を運ぶ水路であった。

平底で巾二桁、長さ十桁程のこの地特有の木舟には、水田十町に実った稲のほとんどを、収容できたはずである。

これを齢十歳ばかりの子供が自由にあやつり、部落の岸边まで陸着けする術も心得ていた。竹の棹が川面を棹さす時、ボサッボサッと独特の音をたて、稲で満載の舟が行き交いすれ違う光景は、昨今の車のそれにも似ていた。

これら三町のクリークが行きつくのが、河北潟であり、その大幹をなす川が大宮川であった。

ここでは東蚊爪の舟が、この大川の川底を浚う浚渫を行い、これを「ごん取り」といった。これは川の維持に欠くことのできない作業であるのみならず、河北潟沿岸の水田の盛土や、ひいては肥料の代用をさせる重要な資源をなしえていたようである。

舟の縁が水面まで僅か十疋足らずまでに喚水して進む様は、まさに名人芸を見る思いで、子供心にきまって感心したものである。

これらのクリークには、町から釣人が群がり、主にフナ・川ギス・時には川エビやナマズなどを釣って、一日を楽しむのが特有の風物であり、情緒をかもしていた。

県下でも代表的で、国内でも有数であったかも知れないこれらのクリークの面影は、今ではごく僅かとなったが、残り少ないこれらを、末永く大切に保存したいものである。

(大浦町・前川 雅)





2

## 橋

浅野川と金腐川の2つの流れと、それらの両川から流れ出た幾筋もの小川はふるさと大浦校下に豊かな緑を与えてくれた。

それらの小川には、農作業のために渡ったであろう多くの橋が架かっていた。

川面には、時の流れを示すが如く、ゆらゆらと影を映している。

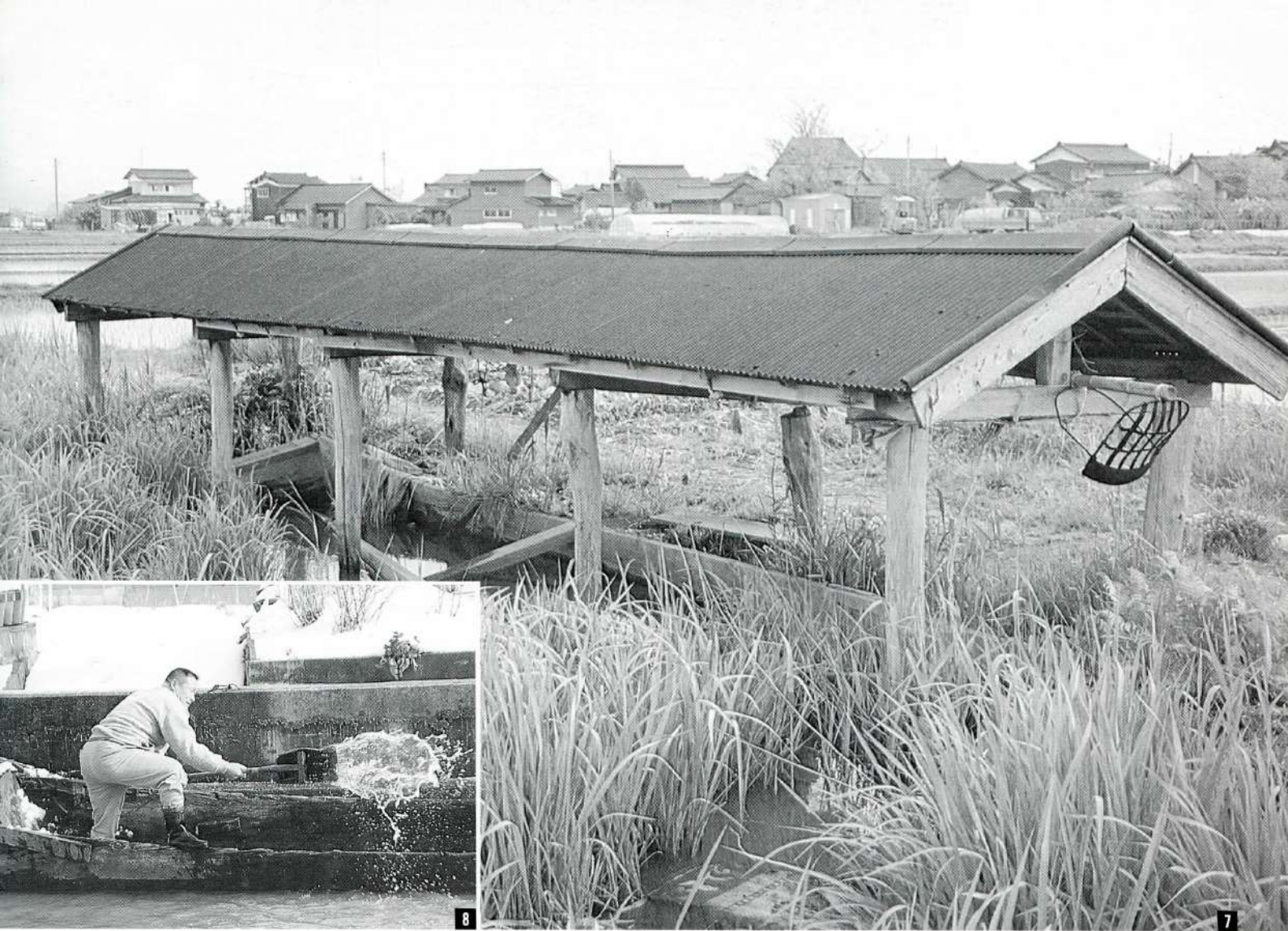


- 2 かつて農耕の馬も渡った木橋も朽ちていくのみ
- 3 小川に架かるコンクリート橋も今では渡る人もいない



- 4 冬の小川の静かな風情  
5 冬の大浦町の遠景  
6 稲を積んだ川舟も行き交うこともなく、今はボツリと浮かぶだけ





## 川舟と舟小屋

大浦校下の人々は、川に親しみ、川を生活の場として生きてきた。昭和30年代までは、稲をいっぱい積んだ川舟が小川を行き来し、河北潟に出るとは、フナやボラを釣るのどかな風情だった。川のほとりには、川舟を停泊するために木造りの舟小屋が点在していたが今は主も用がなく、川に沈んでいくのみとなり、舟小屋もヨシに覆われていく悲しい末路となっている。





9



10

- 7 たくさんあった舟小屋も取り壊され、かろうじて残るクリークの面影。舟も朽ち果てて沈んでいく
- 8 アカトリで舟に溜った雨水を捨てる姿も今は珍しい
- 9 のんびりとフナ釣りを楽しむ人の格好の場所
- 10 5月の連休の頃は家族連れの憩いでにぎわう



13



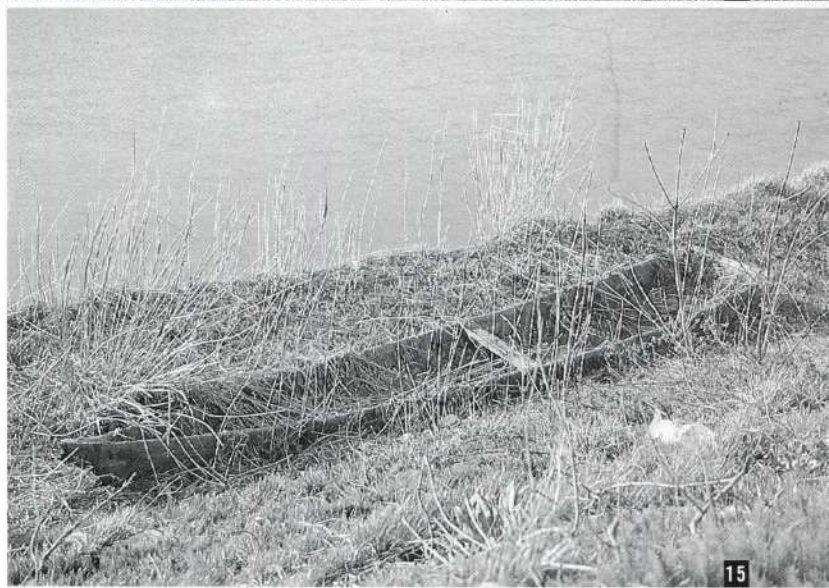
11



12

## ひし

河北潟に注ぐ川面には、初夏になると、白い清楚な花が咲乱れる。水辺の植物の群落も徐々に狭まってきたが、菱の実の姿を初めて見る人は皆その異様な姿に驚く。お湯でゆがいて口にして、菱のとげに痛い思いをしながらも、その美味は格別だ。



- 11 八間川のヒシの群落は見る人を驚かす
- 12 初夏になると咲く白い清楚なヒシの花
- 13 ヒシの実の味を覚えている人は少なくなりつつある
- 14 浅野川堤防より下流を望む
- 15 陸に上がった朽ちゆく川舟をヨシが覆っていく
- 16 用水より水田が高いため、パーチカポンプで水を上げて田にひく